
クールな彼女

Satch

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クールな彼女

【Nコード】

N4528U

【作者名】

Satch

【あらすじ】

「私の胸を触ったです」「は？」目線を胸に向けると『ぺたーん』と書き文字が入りそうな感じだ！「えっと…なんていうか、ごめんなさい！」「…失礼な変態さんですね」

変態な主人公、クールなヒロイン、ブラコンな妹、幼馴染、出会い頭にぶつかるなど、王道な設定でしか書けない作者の、ハートフルコメディの予定。

第1話：遭遇（前書き）

今回こそクールな女の子を書くぞ！という意気込みで書き始めました。

デレはあるのかな？

いまのところ6話で完結予定。

第1話：遭遇

「…にいい」

「おにい」

「うーん」

「起きて」

「うーん」

「起きろ！」

不意に激しく揺さぶられて目を覚ますと、目の前に愚妹の由佳の顔があった。

お互いの吐息を感じるくらい近いが、いつもの事なので特に動揺する事も無い。

「近いから離れろ…」

「もう！ 妹の可愛い顔を間近で見ても、思わずニヤけるとか、ちうしちうとかかないの？」

「ないな」

確かに兄の目から見ても妹は可愛い部類に入ると思うが、実の妹にちうとか…ちうってなんだ？

「うえーん、おにいがいじわるする」

「嘘泣きはいいいから早く降りてくれ」

妹は現在俺の上にまたがっている。

誤解が無いように解説すると下からベッド、俺、かけ布団、妹の構造となっている。

間にあるかけ布団の役割は重要だ、朝から妹に欲情する変態兄貴の汚名を着せられずに

済んでいるからだ。俺は変態は変態でも健全な？変態だからな！

「そのまま、また寝たらダメだからね」

とか指で俺の鼻をつついてやっと降りてくれた。

そっけつなのは綺麗なおねえさんがやってこそ効力を発揮するんだぞ！

ベッドから出てトイレに行こうとしたら、由佳が腕を絡めてきた。

「おにい、同伴で洗面所行こう」

「同伴って…どこで覚えてくるんだ？」

「こないだ連ドラでやってた」

うん、意外に大きく柔らかい感触に包まれるけど、妹相手に興奮はしないからね！

「おにい、鼻血」

「…ありがとう」

すかさずティッシュを渡してくれるけど、兄貴が鼻血出している事に疑問は無いのか？

2人で仲睦まじく洗面所に… いかない、それよかトイレ！ トイレは同伴じゃないよ？

用を足して洗面所に向かうと、由佳は先に歯を磨き始めていた。

洗面所は2人では少し狭いのだが、一緒に磨かないと後で機嫌取るの大変だからな。

「おにい、さつきから固いの当たってる」

歯ブラシを口からだし、頬に手を当ててぽうつと頬赤くしているけど、

当たってるのは肘だから固いのは当たり前だ！

「誤解を招く言い回しをするな！」

と空いた手で由佳の額に軽くチョップをお見舞いすると、チロつと可愛らしく舌をだす。

こういうところは可愛いんだけどね。

って自己紹介がまだだった、俺の名前は、下柳健二、高校2年生だ。妹の由佳は高校1年生で同じ高校に通っている。

妹の学力ならもつと良い高校に行けたと思うのに、何故か同じ高校に入学してきた。

由佳曰く「おにいより良い高校に行ったら、肩身狭いかなって思ってたえ」だってさ。泣いていい？

由佳は先に洗顔を終えて洗面所を後にする、流石に2人で同時に洗顔は出来ないからね。

洗顔を終えてリビングに行くと、テーブルには焼きたてのパンと目玉焼き、サラダが並べられてた。

うちは両親が海外で仕事をしている関係で、炊事洗濯は由佳の仕事だ。

洗濯に関しては「おにいに下着見られり、触られたくない！ 恥ずかしいから…」
ということが決まった。

「おにい、いつも学校先に行っちゃうけど、今日は待っててよ！」

「はい、はい」

「はい、は1回」

「へい」

「へい、は2回」

「へい、へい、ってなんでだ！」

朝食を食べ終わると、俺の部屋で制服に着替えようとする由佳を自室に押し込んで、制服に着替え、

玄関では2人で押し合いへし合いをして（主に由佳が絡んでくる）
ようやく外に出る。

「おはよう」

「由紀ちゃん、おはよう」「由紀、おはよう」

由紀はお隣に住む幼馴染で、由佳と同じ高校1年生だ。そして俺と同じ高校：というか由佳と同じ高校？

兄妹のように育って来たせいもあるのと、由佳と由紀で名前も似てるので、

本当の妹のように思ってる女の子だ。

なので朝、由紀が起こしにきてもあまり嬉しくはない。

「なんか失礼なと言われてる気がするけど、2人は相変わらず仲良いね」

「そうか？ うつとおしいだけ、いてっ！」

おもつきし足踏まれた、由佳さん案外体重あるんだね！

「もっかい踏む？」

「い、いえ、結構です」

そして時々エスパーのように心を読む。

「っていつか、おにいさつきから口に出して言ってるけど？」

「あははは」

「由紀、笑いすぎ」

由紀はチロつと可愛らしく舌をだす。由佳と由紀はなにげない仕草も似ている。

学校までの道のり（徒歩）は、3人で通学するときはいつもこんな感じだ。

：

学校に着くと妹2人（本当の妹とそれっぽいの）と別れ校舎2階の教室へ向かう。

階段を上った先の曲がり角に来ると、タッタッタという足音が聞こえた瞬間、ぶつかると思ったのもつかの間、むにっという感じで何やら柔らかい物体とぶつかった。

「…っ！」

俺はなんとか耐えたが、ぶつかってきた柔らかい物体…女子のほうはその場に尻餅をついた。

すかさずパンツが見えないか確認したが、とっさに手で押さえたようにで拝見できなかった。

拝見って拝んだら見せてくれるって語源…じゃないよね？

パンツは見えなかったので顔を確認すると、かなりの美少女だった。俺の脳内では1年生から3年生までの、全クラスの美少女名簿が高速でめくられて行ったが、該当者なし！ そんなバカな！俺の美少女名簿は完璧なはず！

「…変態さん」

まてまて落ち着け、もう1度脳内名簿をゆっくりめくるが、該当者

なし？ なん…だと！

「…その変態さん」

こないだ1年生を制覇して、やっと完成した脳内美少女名簿に穴があるなどと誰が認めるといふのだ！

「…あほの変態さん」

「え？ なに？ 今忙しいんだけど？」

ぶつかってきた女の子は無表情でじいっと見てる。なんか怖い。

「…謝らないのですか？」

「え？ っていつかぶつかって来たのそっちだよね？」

「それは謝ります、ですので謝ってください」

えっと…これトンチですか？ そういうの苦手なんだけどな。

「えっと…俺、謝るようなことしたかな？」

「私の胸を触ったです」

「は？」

目線を胸に向けると『ぺたーん』と書き文字が入りそうな感じだ！

「えっと…なんていうか、ごめんなさい！」

「…失礼な変態さんですね」

もし、仮に、万が一、百歩譲って、触ったというか触れた？としても分らないよね！

「…失礼な変態さんですね」

彼女は良く見ると幼い顔立ちで目はパツチリと大きく、身長は150cmあるかどうかという、高校生というより小学…。黒髪のツインテールで、残念なぺたーんで、ニーソックスを履いている。絶対領域が眩しい。

「…変態さんに視姦されました」

「違うから！ そんなことより、君は何年生？」

「…1年ですけど？」

「なんだ後輩か」

「…急に態度が大きくなりましたね、というか先輩でも進級できるですね」

「うぐう！」

痛いところを針で突いてくる、しかし1年生にこんな娘いたかな？

「何組？」

「…」

急に黙り込む後輩女子。

「どうした？」

「職員室はどこですか？」

「どこって…入学してからだいぶ経つと思うけど、まだ覚えてないのか？」

「…今日転校してきましたですから」

「なんだ、そっか、じゃあ連れてってあげるよ」

そっか、そっか、それなら俺の脳内美少女名簿に居なくて当たり前だな。

と手を引いて行こうとしたら手を引っ込められた！

「いきなり手を繋ぐとか、ありえないです…」

「いや、連れて行ってあげようかなと…」

「子供じゃないので、手を引いてもらわなくても大丈夫です」

公然と手を繋ぐチャンスだったのにな。

…

職員室に着いたがどの先生に言えばいいか分らないので、とりあえず担任のところに行く。

「先生」

「ん？　なんだ下柳か…」

「なんだはないでしょう、それよりこの娘…」

と彼女に視線を送る。

「おまえ…遂に幼女誘拐を…」

「違うから！　っていつか遂につてなんすか？」

いつかやるだろうみたいなの？

「んで、見掛けないその娘は？」

「転校生らしいんですけど…」

「ああ、1年生の転校生が来るという話だったな、じゃあ俺が担任のところに連れて行くから、おまえは早く教室行け」

「いえっさー」

彼女を見ると相変わらずの無表情だが、心なしか心細そうな顔に見えた。

「大丈夫だよ、なんかあれば俺に言えばいい、2年3組にいるから」

と肩をポンと叩くと、肩の力が抜けたようだ、無表情だから読み取りにくいけどな！

「じゃあまたな」

「…また」

彼女は小さな声でそう言った。

第1話：遭遇（後書き）

序盤で、このまま妹ルートで突き進んでも面白いかもって思ったのは内緒です。

第2話：変態（前書き）

第1話で書き忘れ…書ききれなかった主人公についての補足になるので、
セリフは少なめです。

第2話：変態

「うーす」

いつものように砕けた挨拶をしながら教室に入るが、いつものように挨拶は返って来ない。

何を隠そう、いや隠す必要は無いけど、俺にはクラスに友達がい無い。いや隠したほうがいいのか？

理由は1つ、胸を張って言おう、それは変態だから。

いや健全な男子高校生なら普通だと思うが、このクラスは進学クラスだから、

俺みたいな一般人は妙に浮いている存在と言える。

なぜ進学クラスにいるのか？

それは脳内美少女名簿を作っていることでも分かると思うが、記憶力だけが異常に良くて、

教科書は全て暗記してしまっているため、必然的にテストは学年トップクラスになる。

進学希望ではあるが、別に良い大学に行きたい訳じゃないんだけど、教師達は有名大学合格率を上げたいがためだけに、俺を進学クラスに入れている。という噂だ。

学校のテストだけ良くてもダメだと思うけどね。

朝のHRが終わると、1時間目の授業に向けクラスの空気が張り詰めていく。

その息の詰まる教室を出て、いつものように屋上に向かう。

そしていつものように昼寝だ、教師達はもう諦めて何も言っていない。
っていうかテストの点だけは良いので、大目に見ているところもあるかも知れない。

そしてどのくらい時間が経ったか分らないが、ふと人の気配を感じた。

「変態先輩…こんなところにいたですか…」

「ん？」

聞き覚えのある声に、目を開けると、朝廊下でぶつかったあのぺったんこな女子だった。

感情の読み取れない目でじいっと俺を見下ろしている。

「白か…」

「？」「…っ！」

一瞬何を言われたか分らなかった女子は、自分の位置と俺の位置を見て、慌ててスカートを押さえた。

「見たですね？」

「うん、当然見た！ 見えなくても見た、いや見えなかったら見る！」

「しょうがない変態さんですね、最後のは捕まりますよ…？」

彼女は呆れたような顔をして（実際は無表情のままなんだけどさうゆう風に見える）、ため息を吐く。

「それよりどうしたの？　なんかあった？」

「いえ…えつと…」

彼女は何故か目を宙にさ迷わせて、おどおどしている、ように見えた。

「あ！　たまたま気分転換に屋上に来ただけです…」

「今、あ！　って言ったよね？」

「…言っていないです」

すると彼女はわざとらしく、ぺったんこな胸を大きく膨らませて深呼吸をしている。

「えー？　俺を探してたんじゃないの？」

ほとんど冗談で言ったのだが…

「…探してないです、偶然です、たまたまです、教室を覗きに行ったりしてないです」

ものすごい早口なんだけど最後バラしちゃってるよね？

でもこれ以上突っ込んだら、どこかに行ってしまういそうなので、生暖かい目で彼女を見ておく。

まあ好かれるようなことしてないし、怖いもの見たさで探してたん

だろうけどね。

「そっか、だったら邪魔しちゃう悪いし、そろそろ俺行くわ」

「あ…」

彼女はどこか名残惜しげな顔をしている、ように見える。

「ん？」

「…いえ、なんでもないです」

呼び止められるかと思ったんだけど、まあいつか、とそこであることに気が付いた。

「あ、そうだ！」

「はい！」

表情はあまり変わらないけど、少し嬉しそうに見えるのは、俺の願望だろうか？

「名前、まだ聞いてなかったよね？」

「あ…そうですね、竹中です…竹中美優です」

「みゆちゃんか…じゃあ、『みゆーちゃん』って呼ぶわ」

『ゆ』を小さい『ゆ』で言うのがポイントだ。

「…いきなり慣れなれしいですね」

美優…みゅーちゃんは少しジト目で睨んでいる、ように見える。

「そっかー…じゃあ普通に竹中さ」「せ、先輩がどうしても呼びたいのなら、わ、私は我慢します」

「う、うん」

なんとなくみゅーちゃんの取り扱いが分ったような気がする。

「変態先輩の名前は」

「ん？ ああ、俺は下柳…下柳健二って言っんだ」

「じゃあ、変態先輩と呼ぶです」

名前を聞いた意味は！ まあ変態だから別に良いけどね、いまさら下柳先輩とか背中痒くなりそうだしさ。

「じゃあ、またな」

軽く手を振って屋上を後にする。

「…また…会える…ですか？」

彼女がつぶやいた小さな声は俺には聞こえなかった。

…

昼休み、いつものように屋上でパンをかじりながら双眼鏡を覗く。
校庭でサッカーをする連中を見るわけでもなく、バードウォッチン
グでもなく、

言うならば、スクールガールウォッチングだ！

ルは発音せずに言いましょう。では一緒に、スクーガーウォッチン
グ！

午後の体育に向けて、更衣室で着替える女子達を観察する目的をも
った、健全なサークルです。

1人しか居ないけどサークルです。

この学校には体育の着替えを行なうための女子専用の更衣室がある。
男子は教室とかその辺で着替えやがれっていう素晴らしい校風です
ね。

更衣室は教室や校外から見えない位置に窓があるが、屋上からはし
っかり見える。

普段は屋上への扉には鍵が掛けられているが、合鍵を作る夢を見た
らなぜか手元に合鍵があった。

白昼夢ってやつだね！ いやまあ作っただけだ。

2、3年生には、スクーガーウォッチングは知られてしまっている
ため、

カーテンがキッチリ閉まっているが、1年生はまだ境内にいる鳩の
ように無警戒だ。

早速窓際で着替えている娘を発見、上下白の下着姿だ、でも胸はペ
ったんこだ、ってか全体的に小さくない？

双眼鏡を少し上に向けると顔が見えてきた、ってあれはみゅーちゃんじゃん！

やっぱりみゅーちゃんには白が良く似合うなあってほわーんとしてたら、

みゅーちゃんに話しかけるようにして、近づいて来た娘がいた。

この娘は細すぎず太すぎず、出るところは出てないところは出てない、って当たり前か、

なんとも美味しそ…こほん、なんともスタイルの良い娘だった。

「って由佳かよ！」

あぶない、妹に欲情するところだった！

由佳はみゅーちゃんに何かを言いながらカーテンを閉める、カーテンが完全に閉まる瞬間、

あるうことが一瞬こっちを見上げてきた！ 見つかった？ いや天気でも確認したのか？

なんて思っていると、ポケットで携帯が震える、由佳からメールだ。

- 見たかったの如果说てくれれば、いつでも見せるのに（はあと）

「おまえを見るのが目的じゃねえ！ ってかやっぱバレてた！」

…

午後は巨乳美人の翔子先生の授業を受けつつ、ぼんやりと窓の外の校庭を眺めている。

校庭では1年生の女子が走り高跳びをやっていて、なんとはなしに1人の女の子を目で追っていた。

歩いても走ってもジャンプしてもまったく揺れる気配なしという、ミラクルを連発しているその娘は、言うまでもなくみゅーちゃんだった。

ふと視線に気付いたのか、こちらを見てから自分で身体を抱くようにして何かつぶやいている。

そこで俺は特殊能力の変態アイを発動する、わけもなく双眼鏡を取り出し口元を確認すると、

「…へんたいせんぱい」と動いていた。まあ変態は俺にとっては誉め言葉だけだな！

みゅーちゃんの横でモデルのようにポーズをとっていた由佳が、俺が反応しないのを見て口を尖らせていた。

そんな感じでみゅーちゃんを眺めてるうちに授業は終わり、俺は即効で移動する。

行き先は更衣室、体育を終えた女子たちが帰ってくるまえに潜入する。

といっても制服をすーはーする訳でもなく、制服に白濁した何か付けるわけでもない。

俺はそんな変態じゃない！ 着替えを間近で覗くだけの健全な変態

だ！ ツツコミは不要だ！

がやがやと言う感じで女子たちが帰ってきたので、慌ててロッカーに入り準備完了。

「走り高跳びつて、やる意味が分ないよねー」

「社会人になって必要なのかよって感じだよねー」

まあ学校の授業なんて大抵そういうものだと思っただけ。

しかし間近で女子たちが着替えてると思うとなにか興奮するよね？

女子達の着替えをロッカーの隙間から堪能していると、俺が隠れているロッカーが急に開けられた。

「…」

「…」

ロッカーを開けたのは、活発そうな少し小柄な女子だった。数秒見つめ合ったあと無言でロッカーが閉められ、そして…

「キヤーー！！」

耳をつんざくほどの大声量の悲鳴が響き渡った。

俺は慌てるでもなく普通にロッカーを出ると「やあ」と爽やかに挨拶、

呆気にとられる女子たちを尻目に、颯爽と更衣室を出ると、慌てて走って逃げる。

更衣室ではひとしきり大騒ぎしたあと、1人の女子が
「あの人知ってる、校内でも有名な変態らしいよ」と語ったと、後
で由佳に聞いた。
さすがに由佳も自分の兄だとは言えなかったという。

第3話：自宅で遭遇

自分の部屋で最近仕入れたDVD（裸の女の人たちが運動会的なことをしているアレなやつ）を見ていると、部屋の外から妹の由佳の呼ぶ声がする。

「おにいちゃん？」

おにいちゃんなんて久しぶりに言われた気がする。呼ばれ慣れないので、背中がムズ痒い。つていうかいつもならソックもなしに何も言わずに部屋に入ってきて、

「なんで何もしてないの！」と意味不明なことを叫びながら逆ギレするのに、今日はどうしたんだろう？

鑑賞中だったDVDを止めてからテレビを消し、部屋のドアを開けると

由佳は露出度の高い部屋着ではなく、余所行きの格好をして立っていた。

「どうした？ 出かけるのか？」

「ううん、あのね、友達連れてきたから、おにいちゃんを紹介しようと思って」

「うん？ ああ、そういえば、そんなこと言ってたっけ」

「呼んで来るね」

「ああ」

休日になると由佳は俺の部屋でゴロゴロするのが常なので、友達がないのかと心配していたところだ。

ドタドタと小柄な女の子の腕を持って、由佳が友達を連れて戻って来た。

「美優ちゃんだよ、かわいいでしょ？」

「みゅーちゃん！」

驚いた事に由佳が連れてきたのは、クールペったんリトルガールのみゅーちゃんだった。

「せんぱい…？　っていうかぺったんは余計です！」

え？　突っ込むのそこだけ？　っていうか心を読まれた！？

「おにいちゃん声に出して言ってるけど、って知り合いだったの？」

「う、うん、ちょっとね」

すると由佳の目がジト目になる。

「あやしい…」

「そ、そんなことないよね？　みゅーちゃん？」

「…はい、転校初日に職員室に連れてってもらっただけで、胸を触られたりパンツ見られたりしてないです」

いやいやそれもうされたと言ってるのと同じだよな？　って胸は触ってないし、パンツは…見たか。

「そうなんだ、おにいちゃんは変態だけど、基本的に女の子には優しいからね」

まあ…変態だから別に良いんだけど、身内にまで言われると少し悲しくなるね！

「じゃあ、美優ちゃんどうぞ入って」

「なんで俺の部屋！？」

みゅーちゃんは何の迷いもなく、俺の部屋に入る。って男の部屋に簡単に入るなと言いたい。

いや由佳もいるし、何も起きないけどさ！

「あたし着替えてくるから、美優ちゃんにいたずらしないでよ？」

「するか！」

っていうか心配なら自分の部屋に連れて行けつつつの！

「あのーみゅーちゃん？　そんなに見回しても面白いものないよ？」

みゅーちゃんは部屋の中をキョロキョロと興味深そうに見回し、あちこち開けて回る。

いやいや男子の部屋を漁るのはダメなんだからね！

物色するみゅーちゃんをなんとか捕獲しベッドに座らせると、俺もその隣に座る。

するとみゅーちゃんは警戒するように少し距離をとった。なんとなく頬が赤いように見える。

「何もしないから大丈夫だよ？」

「いえ、あんまりせんぱいの近くにいと妊娠するですから」

「しねえよ！」

みゅーちゃんは終始無表情なので、冗談なのかなんなのが分かりづらい。

「おまたせ」

由佳が部屋着に着替えてきたが、ぶかぶかのタンクトップとホットパンツといういつもに増して露出度が高い。

ちよつと動くと胸の先や、ホットパンツの隙間からいろいろと見えそうだし！ 下着着てないの？

でも実の妹に興奮とかしないから！

「おにいちゃん、鼻血」

「お、さんきゅう」

いつもはティッシュを渡してくれるだけだが、今日は優しく鼻を拭いてくれる。

呼び名もまだおにいちゃんのままだし。

「実の妹にこんなえつちな格好させてるですか、やっぱり変態先輩ですね」

みゅーちゃんが少し目を細くして睨んでいる。ように見える。

「嫌がる私をおにいちゃんが無理矢理……」

由佳は自分で自分を抱くようにして、身体を震わす演技をしている。

「……」

みゅーちゃんがどん引きしているのが手に取るように分かる。って信じるな！

「いやいや、みゅーちゃん、嘘だからね、本気にしないでよ?」

「おにいちゃんは、なんで必死なの?」

きゅるんと音がしそうな無邪気な表情で、悪魔のようなオーラを纏う。

「……っ！ そ、それはおまえが友達に誤解されたままだとまずいと思っでさ、ははは」

我ながら苦しい言い訳だと思ったけど、そもそもなんで妹に弁解する必要があるんだろう?

「そっか、おにいはやらしいね」

「そこはやさしいと言ってくれ……」

「お二人は仲が良いんですね、私は兄妹がないのでうらやましいです」

みゆーちゃんはどこか寂しげに見える表情でポツリと言った。

「じゃあ、みゆーちゃんも妹になる？　いてえ！」

由佳が俺の腕をつねりながら半眼で睨んでいた。

「わ、わたしは妹よりも…」

「え？」

「な、なんでもないです！」

みゆーちゃんは何かごにょごにょ言っていたけど、なんだろう？
めっちゃ気になる。

それから3人でゲームをしたり、俺と由佳のアルバムを見たりして
過ごした。

「それじゃ、私はそろそろ帰るです」

DVDデッキの時計を見ると午後6時になろうとしていた。

「え？　美優ちゃんご飯たべていきなよ」

「でも…」

みゅーちゃんは少し困ったように両手の指先を付けたり離したりしている。

「そつだよ、俺たち親が海外で居ないから、いつも2人で寂しいしね」

俺がそう言つとみゅーちゃんは、ぱあっと明るい表情になり、ニコつと笑った。(イメージです)

「そつなんですか？　じゃあ…」

「よし、決まりだね！」

そついうと由佳は部屋を出ながら振り向き「おにい今日は美優ちゃんいるから裸エプロンは無しね」と特大の爆弾を投下してドアを閉めた。

「…」

みゅーちゃんはゴミ虫でも見るように俺を見る。

「いや…嘘だからね？」

由佳のやつ！　っていうか、みゅーちゃんすぐ信じすぎじゃない？
お兄さんは将来が心配です。

「…由佳ちゃんが作るですか？」

「あ、うん、俺も作れなくもないけどね」

「…そうですね」

「…」

「…」

ヤバイ2人になったら緊張して来た！

「せんぱいは…」

「うん？」

「私と話してて楽しいですか？」

みゆーちゃんは真っ直ぐ俺を見ながら、不安そうに瞳を揺らす。

「え？　なんで？」

「いままで、友達と呼べる人は居ませんでしたから、私と話すことは楽しくない事なんだと…」

「そう？　俺は楽しいけど？　可愛い娘と話して楽しくないわけがない！」

まあ俺の持論だが、健全な男子なら普通そうだろう。

例えそれが感情があまり外に出ない娘だったとしても、他のやつは知らないけど、俺は楽しいと感じる事が出来る。

「か、かわいい？　わ、私が？」

白い頬がほんのり赤く染まって見える。

「うん、学校でもトップクラスだと思うよ?」

「そ、そんなこと…ないです…よお」

みゅーちゃんは耳まで真っ赤になって俯いてしまった。っていうか自覚してなかったのか…。

「へ、変態先輩に言われても嬉しくないです!」

みゅーちゃんは、ちょっと拗ねたように、ぷいっとそっぽを向く。でも顔はまだ赤いままだった。

うーん、嬉しくないんだからね! って言われたかったなあ。

ツンデレ彼女は俺の夢なんだよねって、みゅーちゃんは彼女じゃないけどさ。

なんて考え込んでいたら、みゅーちゃんの顔がすぐ近くにありドキつとする。

「せんぱい…怒ったですか?」

「え? なんで?」

「急に静かになったですから」

みゅーちゃんはヒドイ事言う割りに、繊細な性格の持ち主のようだ。

「あ、いや、理想の彼女について考えてただけだからさ」

「り、理想の彼女…ですか？」

「まあ、些細な夢だけだね」

「…」

何故かみゅーちゃんはいじーつと俺の顔を見つめてくる、そんなに見つめられると土下座しちゃうそうだよ。

いや、もしかして眼力で殺そうとしているのか？

「…教えてください」

「え？ な、なにを？」

不純異性交遊なら俺が教えてもらいたいくらいだけど？

「り、理想の彼女…」

「へ？ そんなの聞いても何の役にも立たないよ？」

「なんの役にも立たないですが、特別におねーさんが聞いてあげるです！」

なんの役にも立たないって強調しなくてもよくね？ っていうかなんで上から目線？

それにおねーさんって…年下じゃなか！ って3段ツッコミなんて初めてしたよ。

「まあいいか、簡単に言うとツンデレだよ」

「…っ！ ツ、ツンデレです…か、私にはハードルが…」

「え？」

「な、なんでもないです！ やっぱり変態さんですね！」

「なぜ!？」

ツンデレ好きは変態ですか？

「ご飯できたよー」

その時、由佳が部屋のドアを開けて顔を出した。

「おう、みゅーちゃん行こう」

「…はい」

「べ、別におにいちゃんのために作ったんじゃないんだからね！」

「何言つてんだ？ あ、おまえ聞いてたろ？」

と由佳の頭に軽くチョップを食らわす。

「えへへ、でもおにいちゃんにツンツンするのは無理だなー」

「まあ、いまさら感があるしな」

「私はそういうことを言ってるんじゃないんだけどな」

「ん？」

「なんでもない」

なんなんだ、みゅーちゃんも由佳も今日は何かを誤魔化している気がする。

「由佳ちゃん」

みゅーちゃんが由佳を連れて俺から少し離れる。

「せんぱいつて…」

「うん、おにいちゃんは…」

何やら2人でコソコソ話しているみたいだが、せんぱいとかおにいちゃんとかは聞こえて、肝心なところ聞こえねえ！

だったら全部聞こえないようにしてくれ、気になって眠れなくなるから！

第4話：約束（前書き）

今回は短めです。

第4話：約束

3人で夕食を食べた後、明日は学校もあるしということ、みゅーちゃんは帰ることになった。

「おにいちゃん送ってあげて」「なんで…」「何か文句あるの?」

「…ありません」で、

みゅーちゃんを家まで送っていく事になった。いやもとから送っていくつもりだったけど、

由佳に言われて行くのも癪だったので、抵抗を試みただけ。あっさり玉砕したけどね。

「先輩…わざわざすみませんです」

「ん? 別にいいよ、こんなかわいい娘を、ひとりで帰らせるわけにいかないからね」

「…」

みゅーちゃんはまた耳まで赤くなってるし、まだかわいいと言われると照れくさいらしい。

由佳にかわいいと言っても、当たり前でしょ? おにいバカ? と蔑んだ目で見えるのにさ。

「せ、せんぱい?」

「なに?」

みゅーちゃんは、赤く染まった頬のまま、こちらを見上げて何かを

言おうとしている。何この破壊力！

「こ、今度のお、お休みは暇ですか？」

「え…？」

「あああの、か、買い物に行くので…その…」

「ああ、荷物持ちね」

一瞬デートの誘いかと思ったけど、みゅーちゃんみたいなのが
娘が、俺を誘うわけ無いしね。

「…そ、そうです、はあ」

えーと、最後のため息は何だろう？ 考えても分らないし、まあ
いか。

「任せてよ！ 俺のみゅーちゃんの頼みを断る訳無いじゃん！」

やべえ！ 俺「の」みゅーちゃんっていつちまったああ。

「俺の…？」

みゅーちゃんはすかさず言い間違いに気付いて、何故かちょっと潤
んだ目で俺を見上げる。

そりゃそうだね、いきなりそんなこと言ったら、変態だね。

って俺変態だった！ じゃあいいのか？ いや良くないよ！ どな
いやねん！

「あ…ああ、ごめん、間違った」

「間違い…ですか」

「うん、ごめん」

「……………い、いつかは、せんぱいの美優になるです」

みゆーちゃんは少し考えたあと、ごにごによと何か言った。

「え？」

「い、いえ、何でもありません、特別に許すです」

「あ、ありがとう」

なんなんだ、ちょっとした言葉のあやなのに、そんなに嫌だったのかな？

「そ、それより、由佳ちゃんは優しい人ですね」

「うん？　なぜ？」

「転校してきた日ですけど、最初は皆面白がって色々聞かれたですが」

「うん」

「緊張して上手く喋れなくて、しかも表情が顔に出ないので、

すぐに潮が引くように周りから人が居なくなっただです」

「…うん」

なんだろう、目から汗が出そう…みゅーちゃんもなんとなく泣きそうな感じだし。

「そんなとき由佳ちゃんが声をかけてくれたです」

「ああ、あいつは昔から小動物とか、かわいい物が好きだったからな」

「小動物…私がちっさいって言いたいですか？」

「いやちっさいとは言わないけど、リトルっていうか？」

「同じです…そしてなぜ英語ですか？」

おお！ この2重のボケにツッコめるとは、みゅーちゃんなかなかやるな！

「わたしはまだ身長伸びてるですから、そのうち2m超えるです」

「超えねえよ！」

みゅーちゃんは何故か無い胸を反らして、うまいことボケてやったぞって感じでドヤ顔。に見える。

「その後も、事あるごとに私に気をかけてくれるので、すごく嬉しかったです、それに…」

みゅーちゃんは、ぱおーつと頬を染めて何故か俺を見つめてる。
背景には百合の花でも咲いていそうな、って、え？ まさかそっち系？

「違います…なぜそうなるですか」

心を読んでツッコむという高等技術まで持っているとは、恐るべし！

「先輩、声に出して言ってるです」

「え？ あはは」はははは、アホや俺！

「あ…もうそこなので、この辺で…」

「早！ あ、でも15分くらい歩いたか」

「はい」

15分歩いたって言ってもゆっくりだったから、急げば10分くらいかな？

「じゃあ、またあした学校で、って学年が違ってから会わないか」

「…だったら…会いに行くです」

「え？」

「な、なんでもないです、またお買い物のにです」

「おう、前日にメールか、由佳に伝言しといてよ」

「えっと…メ、メールするです」

みゅーちゃんは何故か少し逡巡してからそう言った。メアドは昼間に交換済みだ。

「うん、分かったじゃあ…」

「あ…せんぱい」

手を振って帰ろうとすると、みゅーちゃんが寂しげな表情で俺をじっと見る。

「なに？」

「あ…いえ…何でもないです」

そう言ってみゅーちゃんは目をそらした。何かをお願いしようとして諦めた感じだ。

今までもこうして、いろいろ諦めてきたのでは無いか、と思わせる仕草だった。

その時、何故かそうしなきゃいけない気がして、俺はみゅーちゃんの頭をなでなでしてあげた！

「ふにゃ！」

みゅーちゃんは、ビクツと身体を震わせて、今まで出したことがない声をだしてビククリしていた。

「にゃ、にゃにするですか…?」

「えーと…なんとなく?」

そっついながらもまだガシガシと頭を撫ぜていると、みゅーちゃんがモジモジしだした。

「…やつ…んっ…せん…ぱい…?」

「ん?」

みゅーちゃんは少し赤くなった頬と、潤んだ瞳で俺を見上げる。

「…セクハラです」

「ち、ちげーし! サラサラな髪の毛の感触なんて楽しんでねーし
!」

みゅーちゃんの頭から手をどけて必死に言い訳しようとしたけど、失敗しました!

「ふふ…冗談です」

あれ? すぐ無表情になったが、今一瞬笑ったように見えた、気のせいだろうか?

「みゅーちゃん今笑ったでしょ?」

「…?」

みゅーちゃんはきょとした感じで俺を見ている。

「気のせいかな…じゃあ、みゅーちゃんまたあした！」

俺が手を振ると、みゅーちゃんは少し恥ずかしそうに、胸の前で小さく手を振った。

「また…あした…」

第5話：新しい約束（前書き）

当初の予定よりも何話が長くなりそうな感じですが。

第5話：新しい約束

学校に行くと、なんだか様子がおかしい。ざわついているというかソワソワしている感じ。

それよりもおかしいのは皆が俺を見ていること、最初は気のせいかと思っただが、

あからさまに見ていくやつ、遠くでこっちも見ながらなにかコソコソと話しているやつ、

どう見ても好意的な視線ではない視線の暴力。

「なんなんだ…」

「おにい…なにこれ怖い」

さすがの由佳もこの状況を見てすっかり怯えている。

「由紀、由佳を連れて先行け」

「う、うん、分かった」

由紀と由佳が見えなくなるまで見送ってから教室に行くと、担任と学年主任とか言われている先生がいた。

「下柳！ ちょっと生徒指導室まで来い」

「なんでですか？」

学年主任が俺の腕をつかんで引っぱろうとするのを、足を踏ん張って止め、理由を聞いた。

「ここで話せることじゃない！ いいから来るんだ！」

「分かったから離せよ！」

さらに引っぱろうとする学年主任の腕を無理やり振り解いた。

「貴様……」

「引っぱんなくても行つてやるよ」

「……」

無言で先導するように歩き出した学年主任の後ろについていく。

…

生徒指導室に入ると学年主任は椅子に座るように促した。

「お前がやったんだろ？」

椅子に座るか座らないかのタイミングで、前置きもなくいきなりや
ったんだろって言われてもな。

何これ、刑事もののコントか何か？ カツ井でも出て来そうだ。

「何をっすか？」

「しらはっくれるな、お前以外に誰がいるんだ！」

この口ぶりだと俺が何かをしたという確証があつての事ではないの

が分かる。

「なんの話か知りませんが、こんなとこ連れてこられるような事してないですよ」

「嘘つくな！」

「嘘ってなんだよ！ 何の話かはつきり言っして下さいよ」

「盗撮だよ」

「はあ？」

一瞬、間の抜けた顔しちゃったけど、盗撮って…。

「女子更衣室からビデオカメラが見つかったんだよ！」

女子更衣室なら熟知しているけど、ビデオカメラなんてあったかな？

「内容を確認したら、女子生徒が着替えてる場面が映ってた」

俺のテリトリーにビデオカメラだと！ いったい誰の仕業だ！

「聞いてんのか！？」

「それ見せてもらってもいいっすか？」

いや、着替えを見たい訳じゃないよ？ どこから撮られていたか確認したいだけだ。 ついでに着替えも…。

「見せられるわけないだろう!? それにもう警察に渡してしまった」

残念…。

「まだ犯人は分かってないんでしょう? なんでいま俺を疑ってんすか?」

「学校でこんなことするのはお前くらいだからな」

なんだよそれ…。

「俺はやってないです、もう行っていいですか?」

「お前が女子更衣室から出てきたところを見たという証言もある」

勝ち誇ったような学年主任がムカつくけど、切り札になってないな! 自慢じゃないが、俺は毎日のように女子更衣室に行ってるし! っ
てほんとに自慢じゃないな!

「俺がビデオカメラを持ってるところを見たんすか? ビデオカメラから俺の指紋でも出たんすか?」

「…いや」

学年主任が目を反らしたのを確認して、席を立つ。

「じゃあ俺は授業に戻ります」

「いや、今日はもう帰っていい、いつもどおり出席扱いにしといて

やる」

俺がいたんじゃ授業にならないってことね。まあいつも屋上でダラダラしているだけだからいいけどね。

「分かりました」

本当は分かってないけど、分かった振りをしといてやる。

生徒指導室を出ると授業中のためか学校中が静まりかえってる感じだ。

俺の心の中に色々な感情が渦巻いて、気持ちが悪くなりそうだし、帰って寝るか。

…

自室のベッドに横になってもまったく寝れない。

高校つてもつと楽しいところだと思ったけど、由佳は悲しむと思うけど、もういいかな…。

しばらくバイトでもして高卒認定を取って、それから大学に行っても遅くないだろう。

などと後ろ向きな事ばかり考えていると、ピンポンと家のチャイムが鳴った。

時計を見るとまだ12時だから、由佳が帰ってきたわけじゃない。それに由佳だったら別に鳴らす必要も無いだろうと、居留守を決め込む事にした。

ピンポン、ピンポン。

居ませんよー。

ピンポーン、ピンポーン、ピンポー、ピンポー、ピンポ、ピンポ、ピンポ。

「だー！　うるせー誰だ！」

玄關に行つてドアを開けると、みゅーちゃんが立っていた。

「みゅーちゃん！」

「へ…」

「べ？」

「べ、別に先輩が心配だから来たんじゃないん…だか…らね」

いやいや無理にツンデレ口調にしないでいいから、しかも最後めっちゃ声いいさいし。

耳まで真っ赤にしてうつむいているし。

「心配してくれてありがとう」

「！　し、心配なんかしてないん…だか…らね」

「いやいやそれもういいから！」

ツンデレをリアルでやられても…。

ってというか俺の近くに居たら、みゅーちゃんの新しい学校生活が、

また悪いものになってしまっただろう。
それだけは絶対に避けなければならない。

「先輩は…」

「ん？」

「せんぱいはえっちですけどで変態だけど、盗撮なんかしないです」

「みゅーちゃん…」

「つてえっちとすけばは一緒だけどな！」

「それだけ言いに来たです」

「…うん、ありがとう」

「思ったより元気そうなので安心しました」

「どんだけ落ち込んでると思ったんだ？ まあ俺だからこの程度で済んでると思うけどな。」

「じゃ学校に戻るです、またあした…」

「あ、みゅーちゃん！」

「…？」

学校に戻ろうとしたみゅーちゃんはきょとした顔で振り返った。

「…もう…学校では会えなくなるけど、由佳をよろしく」

「え…？ どういうことですか？」

「犯人が見つかったてもさ、どのみち自主退学を勧められるだろうし、もうそれでいいかなって…」

「ダメです！」

みゆーちゃんはいつになく強い口調で、睨むように俺を見上げてきた。

「み、みゆーちゃん…？」

「せんぱいは言ったです、何かあったら俺に言えって言ったです」

「いや、あれは安心させるために言ったのであって…」

「そんなことは聞きたくないです」

「いや、由佳もいるし、もう大丈夫かなって…」

「誰が居ても、せんぱいが居なければ意味がない…よう」

みゆーちゃんの目から涙が溢れてきた。

「いなくなっちゃだよ」

みゆーちゃんはずつむいて肩を震わせる。泣いてる？ なんで？俺なんかのためになんで泣く？

友達もいない、誰からも信頼されていない、どうしようもなく変態な俺のためにどうして…？

「…っ！」

気が付いたらみゅーちゃんを抱きしめていた。不意に視界がボヤける。

あれ？ 俺泣いてる？ どうして？ どうしてこんなに愛おしいんだろう。

みゅーちゃんの小さくて華奢な震える身体を力いっぱい抱きしめていた。

「…せんぱい…抱いて…ください…」

ん？ いまとんでもないこと言わなかったか？ 抱きしめるという意味じゃないよな？

「いやいやいやいやいやいやいや、さすがにそれは！」

「美優じゃダメですか…？」

涙に濡れた顔で俺を見上げるみゅーちゃん。

「ダメとか、そういうことじゃなく、俺たちまだそんな関係でもないし」

「まだ…？」

「あ、いや…うん、そう、まだ」

何を言ってるんだ俺は！

「関係が進んだら、その、す、するですか？」

「いや聞かれても困るけど…」

「じゃ、しないですか？」

「うーん…する、かな」

「やっぱり…変態さんですね」

「んなつ！」

からかわれたと思って身体を離すと、涙に濡れたみゆーちゃんの顔は、少し微笑んでいるように見えた。

「学校…止めないですよね？」

「あ、ああ…」

「じゃあ、止めない証拠に、もう1度約束して下さいです」

「分かった、何があっても必ずみゆーちゃんを守る！」

「はい！ わたしもせんぱいを守るです！」

そういうと今度はみゆーちゃんが俺に抱きついてきた。そしてお互いの温もりを感じるように、そのまましばらく抱きしめ

あ
っ
て
い
た。

第6話：孤立（前書き）

今回は少し難産でした。

ヒロインがまたクールから離れていつてる気もする。

8 / 3 0 誤字修正。

第6話：孤立

今日も由佳と由紀と3人で登校、昨日のこともあるので、先に行けと言ったけど、

由佳は一緒に行くと頑として言う事を聞かなかった。

「堂々と覗くおにいが、ビデオカメラなんて姑息な手を使うわけないもん！」

「…まあな」

「私の部屋になら仕掛けてもいいんだけどね」

と、いたずらな視線を投げかけて来るが、妹を盗撮して何が楽しい？

「そんなことより大事な話があんだけど」

「そんなこと!？」

由佳が半眼で睨んでくるが今は無視しとこう。

「みゅーちゃんと付き合うことになったから」

「ふーん……………なんですと!？」

由佳は口をパクパク動かして、何か言いたいと言えない状態で固まった。

そこまで驚くことか？

すると由紀が放心状態の由佳の手をひいて歩き出す。

「遅刻するし」

「だな」

しばらく3人で無言で歩いていると、みゅーちゃんが緊張した面持ちで立っているのが見えた。

「なにしてんだろっ?」

充分声が届く距離まで来ても、まだ気付いていないみゅーちゃんに声をかける。

「みゅーちゃん」

「…!」

ビクッと体を震わせて、こっちを振り向いた。

「べ、べつに、あ、あんたのことなんて、待ってないん…だから…
ね」

うん、恥ずかしいなら止めればいいのに。

「いや…みゅーちゃん、やっぱりシンデレはそんな好きじゃない…かな」

「え…?」

「いや…うん、ごめん」

「まったく先輩は…わたしがどれだけ…」

みゆーちゃんが何かブツブツ言い始めちゃった！

放心状態の由佳の手をひく由紀と、ブツブツ言いながらも俺の袖をキュツと

掴んでいるみゆーちゃんを連れての登校は、何か異様な雰囲気醸し出しているようで、

すれ違う人みんな振り返って見ていく。

そんな羞恥プレイをしながら登校していると、やっと学校の正門が見えてきた。

そこには何人かの生徒が立っているのが見える。

「なんだろあれ？ 由紀、今日は服装チェックでもあるのか？」

「うん？ そんな情報はないけどなあ…」

うーん、行けば分るかと樂觀して歩いていると、どうやら正門に立っている連中は生徒会のようだ。

他の生徒はおはようございまーすって脇を抜けて登校しているので、俺たちもそれに倣う。

「おはようございました！」

「その男子待て！」

過去形で挨拶したのが気に障ったのか、呼び止めたのは生徒会長の、

えーと…滝川クリス。ルさん？

「滝川だ、そしてクリス。ルは余計だ！」

心を読まれたが、まあ間違えたのはわざとだけだね、俺の脳内美少女図鑑にはしっかり滝川さんは載っている。

凜とした表情にポニーテール、激しく自己主張する2つのおっぱい…山、

すらりと伸びた脚線美を惜しげもなく見せ付けている。

「おねえさまをそんな欲望の眼差しで見るな！」

生徒会長の右隣にいるショートヘア以外特筆するところが無い女子がたしなめてきた。

っていうかおねえさまって呼び方は禁断の香りがするね！

「美少女を見ない男がいるか！」

「…」

みゅーちゃん、由佳、由紀の下級生トリオが、蔑みの視線でプレッシャーをかけてくる。

「…び、美少女？」

生徒会長はほんのりと頬を染めて恥ずかしげにこっちを見つめてくるが、なにこのクオリティの高さ！

「…会長」

ショートヘアーがそんな生徒会長をたしなめる。

「ご、ごほん、お前が下柳だな？」

「そうですが？」

もしかして告白…な訳ないな。

「われわれ生徒会は下柳健二の登校を認める訳には行かない！」

「んなつ！ なんでだよ！」

「…なんでだと？」

生徒会長はギロリという感じで俺を睨んで、そして鼻で笑う。

「ふん、そんなの貴様が良くわかっているだろう？ 盗撮だよ」

やっぱりその件ですよー。

「よりもよっておねえさまを盗撮するなんて許せないわ！」

「え…？ いまなんて？」

ショートヘアーが重要な事言っただぞ！

「おい、瑞穂！ 余計な事を言っくな！」

名前あつたんだ！

「えー、いつもみたいにみつたんって呼んでくださいよー」

「んなつ！ 私がいつそんなこと…」

「冗談ですよ、まったくクリス。ル会長はお堅いですね」

「おまえまでクリス。ルって呼ぶな！」

そんな2人のやり取りを、ぽかーんと見てる俺たちに気付いた生徒会長は、少し赤面してごほんとまた咳払いをする。

「そ、そんなわけで我々はおまえの登校を認める訳には行かない！」
なんかグダグダだね。

「そんな権限は我が校の生徒会には無いはずですが？」

と由紀が一步前に出て異議を申し立てる。頼もしい！

「ふん、そうだが校則には、全校生徒の3分の2以上の署名があれば、学校側に意見書を提出できるとある、
瑞穂が持っているのがその署名の束だ」

するとみつたんは署名の束を少しだけ持ち上げて見せた。

早！ 1日で集めたのか？ どんだけ慕われているんだこの人は！

「で、ですがそれは学校側が受理すればという条件があったはずで
す」

必死に食い下がる由紀、がんばれ！

「そうだがこれは間違いなく受理される」

生徒会長はさも当然だろうと言う顔をしている。

「何故そう言い切れるのですか？」

「それは私が被害者だからだ！」

「…！」

勝負ありだな、由紀が頑張ってくれたが、生徒会は用意周到で待っていたわけだ。

「ごめん、おにいちちゃん、助けられなかった…」

うつすらと涙で滲む瞳で見上げてくる由紀は可愛かった。

「由紀は頑張ったよ、ありがとう」

と由紀の頭を撫でていると、冷たい視線が3つ突き刺さってきた。
なぜ生徒会長まで…。

「な、なあ、会長、その登校できないのは今日からか？」

「いや、今日この意見書を提出するから、今日は登校していいが、生徒会が監視をする、

しばらく登校できないだろうから、荷物でもまとめておけ」

「おっけー」

…

心配する下級生トリオと別れて、自分の教室に入ると、好奇の視線が…なかった。

いつものように皆無関心な表情をしている、俺は初めて別な意味でこのクラスになってよかったと思った。

自分達の勉強に支障が無ければクラスメイトが何をしようが関係なしってことだ。

自分の席について俺はふとあることに気付いた、それは警察に事情を聞かれていないこと。

当然こんだけ騒がれていたら話を聞くくらいあっても良さそうなのに…。

そんなことを考えていたら、校内放送で臨時全校集会を行なうため全生徒体育館に集合というものだった。

これはやっぱり盗撮の関係だろう、クラスのやつらは舌打ちしながら移動を開始する。

わざわざ全生徒って言うくらいだから俺も参加しろってことだよな。

そこで、ふと見られている視線を感じて、開いたドアのほうを見ると、ドアから顔だけ出していた生徒会長と目が合った。

生徒会長はビクツとして何も言わずにドアの影にスライドして消えていった。

いやドアのすりガラスに影が写っているからそこにまだ居るんだろう。

ってか生徒会長みずから監視！？ 誰かに任せればいいのに…。

…

「であるからして…」

校長話しなげえよ、もう誰も聞いてないし、みんなあくびを噛み殺しているから！

「先日我が校で、あつてはならない事件がありました」

やつと本題？　そこから話し始めればいいじゃん！

「生徒諸君においてはこのような事件を起こさないよう、勉強にクラブ活動に励んで頂きたい」

そう締めくくって校長は壇上から退いた。　っていうか本題短え！

「続きまして、生徒会長のお言葉」

校長より生徒会長のが後つて…。　滝川生徒会長が壇上に登場すると、校長の話で下がり切った生徒達のテンションが、うなぎのぼりに上がっていく。　やっぱ人気あるんだなこの人は。

「先日私は、下柳…いやある男に卑劣な盗撮を受けました、その犯人と思わしき男はのうのうと登校し、いやらしい目で私の全身を舐めるように、いえ舐められたと言っても過言で無いくらい、全身くまなく観察されました！」

いや…ツッコミどころ満載なんですが…。

って、名前言うから、ほぼ全員の視線が俺に向いているじゃねえか！

「私は下柳…いやその男の行為を許す事ができません、ですが私も鬼ではないので、逮捕、退学させられる前に、その男に自主退学という選択肢を与えます」

自主退学はしない、みゅーちゃんと約束したんだ、何があってもみゅーちゃんを守るって。

「もしこの件で何か言いたい事がある生徒は、今発言するか、後で生徒会室に来て欲しい、以上だ」

そこで1年生のほうがザワザワと騒がしくなった。誰かが手を上げているようだ。

「ん？ 貴様は今朝の…何か言いたい事があるなら言ってみろ」

生徒会長が気付いて、発言を許可する。

「…は…わ…て…」

何か発言しているみたいだけど、よく聞こえない…。

「聞こえんな、壇上のマイクを使いたまえ」

会長に言われて、おずおずと壇上に上がってきたのはみゅーちゃんだった！

「みゅーちゃん…」

壇上に上がったみゅーちゃんは、マイクを指でトントンと叩いて確認している。

いやさつき会長とか話してたし確認しないでいいと思うよ？

「せんぱい、下柳せんぱいは、不注意でぶつかってしまったわたしの胸を触り、

転校してきたばかりのわたしを職員室まで連れて行ってくれました」

「む、胸を触った！？」

いやいや触ってないから！ みゅーちゃんは俺のフォローをしてくれんじゃないのかな？

いい話と悪い話で相殺されちゃってるから！ ってもう俺限定になってるね…。

「屋上ではパ、パンツを見られましたが、せんぱいのお部屋ではちゃんとわたしの話を聞いてくれました」

「パ、パ、パンチュを見られた！？ お、お、お部屋！？」

相殺どころか悪い方が勝ってるよね！？ 会長も噛んじゃってるし！

「そんなせんぱいが盗撮なんてすると思いますか！？」

みゅーちゃんは説得力って言葉を知らないのかな？

「するな？」「しそくだよな？」

とか話しているのが聞こえてくる。

「そうです、そんなせんぱいなので、盗撮なんてするはずがありません！」

「いやいや、みゅーちゃんもつと視野を広くして、回りの意見に耳を傾けようよ…。緊張してんのかな？」

「ですので、犯人が分るまでは、やりそうだからという理由で、せんぱいを疑うのを止めてください！」

「フォローになってない気がするけど、みゅーちゃんありがとう！」

「もしせんぱいが犯人だった場合は、煮るなり、焼くなり、埋めるなり好きにして構いません！」

「怖！　なんか多いいし！」

「ふん、残念ながら意見書はもう学校側に提出してある、犯人であるにしろ無いにしろ、

意見書が施行されれば、下柳は登校できない、無期停学と同等の扱いだ」

「わ、わたしが守ります」

「どう守るといふのだ？」

「そ、それは…」

「みゅーちゃん、ありがとう、どう足掻いてもここまでのようだ…」

「まだ続いている全校集会のクラスの列を抜け、俺は1人教室に向かう。」

教室に入ると、すでにまとめておいた荷物を持ち、すぐに教室を出る。

教室を出る時、ふと振り返ったが、そこには何の思い出も無かった。

進学クラスで無ければ、友達とバカを言い合ったり、異性の話をしたりして、

今と違う生活があっただろうと思う。

学校と教師の見栄のため、テストの結果だけで進学クラスに入れられた結果がこれだ。

まあ俺も自分の能力をバカ正直に見せてしまっていたのも原因かもしれない。

他のクラスのやつは進学クラスの人間と交流をしたがらないし、進学クラスのやつは、

何の努力もしないでテストだけ良い点を取る俺を妬んでいたし。

完全孤立状態とはこのことだろう。

まるで空気のような学校生活、いや空気は必要とされているけど、俺はいてもいなくても同じ感じ。

俺という存在が学校に居る事を知らせる方法として考えたのが、女子更衣室などの覗きとかで、

変態というレッテルを貼られること、悪い噂はすぐに広がるしね。

まあ嫌々覗いていた訳でもないし、必要とされていないところは変わらないけどな！

そんな俺なので、由佳、由紀には俺のほうから近づかないようにしていたし、

こんな兄（由紀は妹じゃないが）がいても、あいつらなら大丈夫だろうという思いもあった。

でももう疲れてしまった、脳内美少女図鑑も消去の時が来たということかな。

まあハードディスクでは無いので、簡単に消えないけど。

そんなことを考えて歩いていると、正門が見えてきた。

あれを通ってもうそのまま放っておけば、俺の高校生活も、卒業とは違う終わりを迎える事になる。

何の躊躇いもなく普通に歩くように正門を通り過ぎようとした時、走っている息づかいのような、

泣いている息づかいのようなものが、後ろから聞こえて来て振り返る。

「せんぱい！」

最終話：解決

「せんぱい!」

「みゅーちゃん!」

「せんぱい? どこいくですか?」

みゅーちゃんは息を切らせながら両手を腰に当てて、ちよつと怒ったように半眼で睨んでくる。
小学生がおねえさんぶってるようにしか見えないが…。

「どこって…帰るんだけど?」

「サボるですか…?」

「サボるっていうか、今日1日勉強しても意味ないし…」

「あしたもあさつても授業があるですよ? 意味はあります」

あしたもあさつても? 無期停学と同じ状態になると理解してないのだろうか?

「いやいや、無期停学になるらしいから授業には出られないし…」

「はあ…何言ってるですか? 無期停学にはならないです」

「へ?」

なんで無期停学にならないって言えるんだろう？ そんなのは犯人が見つかった時しか…。

「っ！？ もしかして……犯人が？」

「はい、見つかりましたです」

なんてタイミングだ！ どうせならもっと早く…いやいや、贅沢は言えないか。

「で、誰だったの？」

「名前は発表されませんでしたけど、3年生の女子ということだけ…」

「じよ、女子がなぜ…」

まさか百合的なそっち系の人とか…？

「なんでも生徒会長を妬んでの犯行だとか」

「妬んで？」

「はい…」

まあ容姿端麗、頭脳明晰で生徒会長なものな、男子は憧れるだけだろっけど、

女子はそれだけではないのだろう。きっと。

「全校集会は終わりましたので、教室にもどります」

「う、うん」

後で聞いた話だが、警察は目撃頻度も高く、あちこちに指紋がついている俺は、

ビデオカメラから指紋が見つかっていない点との矛盾から、逆に容疑者から外れていたらしい。

それでも見張られてはいたようだが、全然気付かなかった。

頻繁に女子更衣室に入るのもどうかと思うが、被害届が出てない以上今回は追求はしない。

と言ったと言わないとか？

：

午前の授業をいつもの青空学習ではなく、久しぶりに教室で受けたサボリたかったがみゅーちゃんが目を光らせていて、教室を出た途端すっ飛んでくる。

どこかに発信機でも仕掛けてるんじゃないかと疑うくらいに。

みゅーちゃん曰く「せんぱいの思考回路は単純ですから」だとさ。

まあ否定はしないけどね。

昼休みになった時、教室が騒がしくなった、生徒会長が気まずそうな顔で教室に入ってきたからだ。

ゆっくりと俺の前まで来ると、何やらもじもじしてから意を決したように声をかけてきた。

「し、下柳くん…」

「はい」

「その、なんと言つか…」

いつもの生徒会長らしからぬ歯切れの悪い感じだ。

「ここじゃアレなんで生徒会室に行きますか？」

「し、しかし…いいのか？」

「ええ、注目されるの好きじゃないんで」

と周りを見渡すと、生徒会長もようやく周囲の視線に気が付いたようだ。

「そうだな、面倒でなければお願いしようかな」

「問題ないですよ」

教室を出ると腕がなにやらふわふわと柔らかい感触に包まれてふと見ると、

生徒会長が潤沢な胸で挟むように腕を組んでいた。

「んな！？ 何してんすか！」

「瑞穂が、こうすると殿方に喜ばれると言っていたのでな…」

「うーん、それ使ったところ間違っていると思いますよ？」

「そ、そうなのか？」

なんだこの人、天然なのか？

「こつというのは一般的に恋人同士でやるものです」

「んな！？」

と叫んで生徒会長は腕を放すと、物凄い速さで1mくらい距離を取った。

その顔は耳まで真っ赤になっている。

「まあ、男子的には嬉しかったですけどね」

「わ、わたしでもか？」

「生徒会長だからというのも無くは無いです」

一部位が、といったら殴られるだろうな、それにちっちゃい娘が怒り狂って飛んできそうだし。

「せんぱい…そのちっちゃい娘っていうのは、もしかしてわたしのことですか？」

「ひい！」

ぐぎぎと顔を後ろに向けると、みゅーちゃんが物凄い形相で睨んでいた。

「み、みゅーちゃん、い、いつからいたの？」

「せんぱいがデレデレしているところから、ずっといたです」

「全然見えなかった…って、デレデレはしてないけどね!」

「そうですか?」

「あ、会長? この娘も一緒にいいですか?」

「誤魔化したですね…まったくせんぱいは…後でお仕置が必要ですよ」

なんか恐いこと言ってるけど、ここは聞こえなかった振りで通そう。

「会長?」

「ん? あ! うん、構わない」

会長も突然出現したみゅーちゃんに驚いていたのか、少し齒切れが悪かった。

…

「入ってくれたまえ」

「し、失礼しまーす」

初めての生徒会室に緊張して入ると、みったんが笑顔で迎えてくれ

ていた。

「瑞穂、お茶を頼む」

「はい」

みつたんはポットなどが置いてある一角にいそいそと歩いていった。

「そこに座ってくれ」

「はい」

会議室などによくある、畳める長机を2つ並べて配置してあるところの椅子を勧める。

俺とみゅーちゃんが並んで座ると生徒会長は、俺の正面に座った。

「君たちは仲いいみたいだけど、その、付き合ってるのかな？」

「ええ、まあ」

「そ、そうか…」

こころなしか会長のテンションが下がった気がしたが、まあ気のせいだと思っけど。

「どうぞ」

みつたんは図ったようなタイミングで、お茶の入った紙コップを俺たちと会長の前に置くと、
会長の隣、みゅーちゃんの正面に座った。

「何を聞いてるんですか会長は、そんなの当たり前じゃないですか！」

「そ、そうなのか？」

「そうですよ！ そうじゃなきゃ、全校生徒の前であんな風に擁護できないですよ」

みつたんは擁護というところで、俺に視線を送ってきたので、頷いておく。

やっぱり他人から見ると擁護に聞こえなかったよね。

「言われてみれば、そうだな」

生徒会長は、うんうんと頷いているけど、あれは絶対分かってないと思う。

「そんなことよりも、下柳くん」

「はい？」

「今回は、その、申し訳なかった！」

生徒会長はその場で深々と頭を下げると、みつたんもそれに習う。

「会長もついいですよ、もともと俺には悪い評判しかなかったですし」

「そんな訳には行かない、悪い評判があったにしろ、状況を悪くし

た事には変わりがないからな」

「でももう済んだことですし……」

「それでは、わたしの気が済まない」

「そう言われても……」

みゆーちゃんに視線を送ると、スーッと目を反らされた！
そうだなね、この状況で助けを求められても困るよね。

「パ、パンツでも見るか？」

「はい？」

激しく嬉しいけど、何言ってるんだこの人は！

「下柳くんが望むならなら、その、そ、それ以上でも……」

思わず顔がニヤけそうになるが、みゆーちゃんがじいつと見つめているので、何とかポーカーフェイスを保つ。

「だっ たら……」

「だっ たら……？」

ごきゅつと唾を飲む音が聞こえそうな静寂に包まれる。

「もしかして私の体！？」

みったんがそう叫ぶと自分で身体を抱くように震えている演技をする。

「違うから!」

「痛い!」

俺が否定するのと会長が無言でみったんの頭を叩くのと、ほとんど同時だった。

「それで?」

「はい、盗撮した娘達の処分を軽くしてあげて下さい」

警察のほうは会長が被害届を出さなかったため厳重注意で終わったが、学校はこんままだと退学だろう。

「何故、君が彼女たちを擁護するのだ?」

「それは…女子が減ったら詰まらないじゃないですか!」?

「…」

会長とみったんは目を丸くして固まっているけど、みゆーちゃんは頭が痛いという感じで目頭を押さえている。

「…ふっ、面白いやつだな君は」

「え? 何がですか?」

みつたんは意味が分からないという感じで、会長と俺を交互に見ている。

「分かった、学校には進言してみるが、期待はするなよ？ 生徒会長と言ってもそこまでの権限は無いからな」

「ありがとうございます」

「何が？ ねえかいちよおお何がですか？」

みつたんが会長をかくかくと揺すると、制服の上からでも2つの巨大な丘がぶるんぶるん揺れているのが分かる。
じつくり見ていたいが、みゅーちゃんがまたじいつと見つめているので、見ない振りを装う。

今日はみゅーちゃんのプレッシャーが半端ない。

：

「せんぱい、生徒会長の胸ばかり見てたです」

みゅーちゃんは生徒会室を出てすぐ、ぺたぺたと自分の平らな胸を触りながら言った。

「みつたんのも見えてたけどな、いて！」

がしがしとその小柄な身体で俺の足を踏んでくるが、実際はそれほど痛くない。

「せんぱい？　なぜ、盗撮した人たちを擁護したですか？」

純粹な瞳で見上げられて、いつもみたいに誤魔化することが出来なかった。

「おそらくその人たちは、こんなに大問題にあるとは思っていなかったと思うんだよね」

「ですかね」

「このまま見捨ててしまえば、また別の罪を犯したり、墮落した人生を送ってしまうかも知れない、

それも仕方のない事かもしれないけど、俺たちは心も体もまだ成長途中だから、

1つの失敗で切り捨ててしまうのはまだ早いと思う、まあ今後の指導も必要だろうけどね」

「せんぱい……」

「まあ俺みたいにどうしようもないやつもいるけどね」

熱い視線に耐えかねて、つついふざけてしまう。

「せんぱいは…変態だけど、どうしようもないやつじゃないです」

「みゅーちゃん？」

「せんぱいは優しいです、その優しさを上手く人に向けられないだけだと思います」

顔を真っ赤にしながらそんなこと言われると、こっちも物凄く恥ずかしい。

「そ、そうかな？」

「でもわたし以外にはあまり優しくして欲しくないです」

みゆーちゃんは頬を膨らませ拗ねたような顔をする。

考えてみると最初に比べてかなり表情が豊かになった気がする。

「善処します」

「約束ですよ？」

みゆーちゃんは心配そうな顔で見上げてくる。

「お、おう」

真っ直ぐ行くと1年生の教室、階段を上がって2階に行くと2年の教室となる場所で立ち止まる。

「じゃあ、せんぱい、また放課後」

「ああ、あとで教室寄るよ」

「寄り道したらだめですから」

「あ、みゆーちゃん」

俺は廊下を歩いていくみゆーちゃんを呼び止めて言った。

「いんど身体測定させてね！」

最終話：解決（後書き）

クールな彼女はこれで終わりです。今回は結構収穫があった気がします。

薄々気付いていたけど自分にはクーデレが書けそうにない（笑）

本文の警察の対応は実際どうなるのか調べたけど分からなかった
ので、

本作品に都合の良い形にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4528u/>

クールな彼女

2011年10月5日18時18分発行